

創立140周年を迎えて

藏 中 さ や か

神戸女学院は、本年2015(平成27)年に創立140周年を迎えた。1873(明治6)年にタルカット女史とダッドレー女史が神戸港に到着、その2年後、女子のための寄宿学校が開かれ「神戸英和女学校」となり、その後「神戸女学院」(Kobe College)に改称したのが1894(明治27)年のことである。神戸山本通に開学して以来、140年という遙かな時が流れたことに深い感慨を覚える。またそれと同時に、女性のための教育機関として重ねてきた歩みが、150周年という記念すべき大きな節目に近づいているということに、想いを新たにす。

史料室定期刊行物である本誌『学院史料』は、今号で第29号を数える。ここまでの道のりについては、小松秀雄前図書館(史料室)長をはじめとする諸先生方により、本誌既刊号にて詳細に紹介されているので、そちらをご覧ください。第1号(1983年刊行)で、岡本道雄院長は、本誌の発行が『神戸女学院百五十年史』、さらには『二百年史』の編纂を念頭においた史料の収集、解明を主要目的としたものであることを明言しておられる。150年まであと10年という本年、本誌刊行の原点である『百五十年史』編纂に向けた準備が具体的に開始した。2016年4月には年史編纂委員会が発足の見込みである。

140周年記念行事の詳細は後節に譲ることとし、ここには大きな使命をもって開設されたこの史料室が学内外に果たしている役割と、それに関連する今年度の出来事とを略述しておく。

史料室は、「神戸女学院史料室規程」により、(1)学院に関する文書・諸史料の収集、整理、保管、(2)学院史全般に関する情報の提供、(3)機関誌「学

院史料」その他学院史に関する印刷物の刊行、(4)その他学院の歴史に対する関心を高めるための事業、以上の4項目の「業務及び事業を行う」ものと定められている。これらのうち(4)についてその実態を補足すると、学外からの問い合わせに対するレファレンス、本学『学報』への寄稿や、創立者記念礼拝といった学内諸行事への協力と関連展示の手配、また自校史教育への支援等が挙げられる。

自校史教育とは、在学生に対して、自校の建学の精神や独自性を伝え、そこで学ぶことの意義を考えることを促すものである。本学では、チャブレン室が主導する形で他大学に先駆けて「初期神戸女学院」という科目を全学生に向けて開講してきた。本年9月には、文学部飯謙教授、原田園子名誉教授、史料室職員佐伯裕加恵氏はじめ、同科目を支えてこられた方々のご執筆を得て音楽学部津上智実教授編『山本通時代の神戸女学院』（日本キリスト教団出版局）が刊行され、テキストとして、この教育の場で活用されている。本学所蔵の多数の史料を掲載する同書は140周年という折節にも適い、これにより、本学のアーカイブズに対する社会的関心が高まるとともに、キリスト教主義に基づいた教育を展開する本学の歴史を一層身近に感じとってもらえるようになることであろう。

さて最も重要な(1)について述べれば、「学院関係資料」として、宣教師文書(アメリカンボード本部において記録されているものとは別のもので本学独自に所蔵しているもの)と呼ばれる書簡等、歴史的遺産ともいえるべき貴重なものを含む史料類が、また種々の学内刊行物等の年史編纂の際に即座に用いることになるような文書の諸史料が、これまで携わった方々の努力により整理、分類、保管されてきた。これらの史料に関する論文や目録類は、本誌に掲載する等し、広く公開している。

この度、こういった貴重な一次史料を保管する場所として、図書館本館の階下に貴重書庫が新設置され、本年12月、神戸女学院教育後援会主催で開設式が開催された。これは、卒業生の呼びかけによって始まり旧教職員へと広がっていったご寄付と、コーベ・カレッジ・コーポレーション、めぐみ会等からのご

寄付によって実現したことで、特筆すべき最新の出来事である。今後、貴重史料を閲覧するためのスペースを用意することも検討される見込みで、学院史料の存在は広く世に伝わり、その研究成果は社会に還元されていくことになるだろう。

重要文化財の認定を受けた建造物の中にある史料室は、それ自体が大学アーカイブズである。文書を維持管理するだけでなく、本学の建学の精神を伝え、楽器や調度品等を含む学内にある史料的价值を有する文物に関する新たな情報を発信していく源となる場である。日米キリスト教関係史についてはもちろんであるが、明治期の文化や教育、特に我が国の女子教育や大学教育の歴史を考える時、そして阪神間の文化史を紐解く時、史料室が果たす役割は非常に重要なものになる。

150年という節目はすぐそこに見えている。史料室は、ますます本学にとってなくてはならない存在になろう。次代に歴史を伝えるという使命を全うすべく、関係各位のご支援をいただきながらその適切な運営を行い引き継いでいきたい。

この4月から任に着いた私は、歴史の専門家ではない。しかし書記されたものを対象とする研究者として、或いはまた母校に奉職する卒業生の一人として、このことを心に覚え、撝筆する次第である。

(大学図書館(史料室)長)